

平成 19 年 5 月 19 日

北関東フォーラム

於：湯島聖堂

中齋塾 北関東フォーラム 第 2 回講話

本日のテーマは「人生の五計」です。

安岡正篤先生の書かれた『人生の五計』（MOKU 出版刊）を回覧致しますので、ご覧下さい。

今、福田代表幹事から「さあ、学びましょう」と挨拶がありましたので、「学ぶ」についてお話しさせて戴きます。

論語に「学べば則ち固ならず」とあります。

学則不固・・・学ぶ事によって、干からびて硬くなる事はありません。

学べば学ぶほど、心も柔らかくみずみずしくなる。

『人生の五計』の中に、遽伯玉の「五十にして、四十九年の非を知る」という言葉があります。

50 歳になって、今までの勉強の仕方・人生の過ごし方について振り返り、“これだけ知恵が最初から付いていれば、もう少し若い時の生き方は違っているのではなかったろうか・・・”とつくづく反省するという事です。

60 歳は「六十にして、六十化す」という言葉があります。

60 歳になったら、60 歳にあわせて、自分を変化させていく。

それは常に学ぶ事によって可能となります。

海老は成長して自分の殻が固くなってくると、殻を脱ぎ捨てて、新しく一回り大きな殻を作ります。

結婚式で海老が使われるのは、お互いに腰の曲がるまで長生きして仲良く行こうという意味合いはもちろんですが、本当の所は、海老は常に成長を続け、常に殻を脱ぎ続ける。

生きている限り自分の固くなった殻を脱ぎ捨てて、みずみずしい身体を保ち続けるので、おめでたいと言われるのです。

では人生の五計を説明致します。

「生計」・・・この世に生まれて、如何に生きるべきか。

人間としての本質をしみじみ考える時期です。

「身計」・・・世の中に出て、どういう職業が自分に相応しいか考える。

相応しくないとすると転々と変わることになりませんが、そのうちピタッとはまる仕事にぶつかる。

この職業で自分は一生行こう、この職業で世の中に立っていくのだ、と考えるものが身計です。

「家計」・・・子孫を残す考え方からいって、夫婦・親子の関係について、一所懸命考えて実行して行く時期です。

「老計」・・・如何に年をとるか。

如何に自分の心と身体を手入れしていくか。

どのように年をとるか、年いった時に何をなすべきかを考える時期です。

まだ大分先だと思われるかもしれませんが、今の内に考えておくとうよろしいと思います。

今の時代で言えば、50歳から55歳以上は「老計」の真っ只中であると考えます。

「死計」・・・如何に死すべきかを考える時期です。

自分の考え方がある程度定まってきた時には、常に死を考えることも必要です。

回りで亡くなる方が増えれば増えるほど、死計を意識するようになります。

では、『人生の五計』の中から、今ここにおられる方の年代を見て、必要だと思う事を申し上げます。

イギリスには「朝こそすべて」という格言があります。

同じように「黎明即起し、醒後、れいめいそつき 霑恋する勿れ」と安岡先生は清国の曾国藩の信条を紹介しておられます。

目覚めたら、いつまでもぐずぐずしていないですぐに起きなさい。

そうすればやるべき事が沢山あるでしょうという事です。

西郷隆盛は目覚めたら布団を足で跳ね除けて、その勢いで起きたそうです。

私は眼が覚めると、いつもこの言葉が浮かんで来ます。

又、ドイツの諺「レーゼマイスターは得やすい。しかしレーベマイスターは得がたい」が紹介されています。

レーゼマイスターは知識を与えてくれる師匠、レーベマイスターは人生の師匠です。

これは、「身計」の中で説明されています。

安岡先生は「師恩友益」という言葉も説明しておられます。

師匠と友の影響は非常に大きいという事です。

本日の心に残る言葉としてご紹介しますが、この本の中に「**私たちは多く書を読む必要があると同時に、多く人を知る必要があるんです**」という言葉が書かれています。

沢山の書物を読みましょ、そして沢山の人と会いましょという結論です。

沢山の人と会うというのは、名刺交換を沢山して満足するだけでは、少しもその出会いが活きてきません。

一度出会ったら、その人物の深い所までよく付き合ってみる。

そういう付き合いをしないと、自分がはっとするような時に役に立つものは出て来ません。

表面的なお付き合いでは、ここぞという時に、しかるべきアドバイスも出て参りません。

一人の人物と深い付き合いをする事が肝心です。

そして二人、三人と深い付き合いが出来ると、人生が豊かになります。

まさに「六中観」の「意中人有」です。

ですから、どういう友人と付き合うか、どういう師匠を師匠と判断し学んでいくのか、それによってその人の人生ががらっと変わります。

柳生家の家訓はご存知ですね。

小才は縁に出会って 縁に気づかず・・・目の前に素晴らしい縁があっても、目がそちらを向いていないから縁に気が付かない。

中才は縁に気づいて、縁を活かさず・・・縁に気が付いているけれども、なかなか時間が取れないと言っている内に、縁が遠ざかってしまう。

大才は、袖すり会う縁をも活かす。

私は何年か前にある会合に出た時に、その会で詩吟をされた先生に衝撃を受けました。

どうしても習いたいと思って、その先生にお願いして今教えて戴いております。

これは<学びたい>と思ったので、すぐに行動に出ました。

我々が今、学んでいるもののベースは陽明学です。

陽明学は気が付いたらすぐに行動に移すことが基本です。

行動に移るといのは、心の奥深い所から止むに止まれぬ衝動が湧き起って来て動くわけです。

何もしないで動くわけがありません。

皆さんも、これがチャンスと思った時には、どうぞ動いた方が良いでしょうね。

思った瞬間にメモを取り、動く事です。

これは陽明学の根本です。

そういうものを強調するのが、「身計」です。

「身計」をベースにして、我々は「老計」を考えるのが良かろうと思います。

この辺りを一纏めにして、佐藤一斎という方が「三学戒」を唱えています。

「少にして学べば、則ち壮にして為すことあり。壮にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。」

小さい時に学びたいと思って学べば、大人になってそれなりの実績を上げる事ができる。

人さまのお役に立つことが出来る。

壮年で学び始めれば、老年になっても衰える事はない。

年をとってから学ぼうと思って学び始めれば、死んだ後までも、身体は朽ちたとしても魂は後世に伝えられていく。

では、本日のテーマ「人生の五計」のお話しはこれくらいにします。

どうぞ本日ご紹介した本の中に、「生計」「身計」「家計」「老計」「死計」が詳しく書いてございますので、お読みになって戴くとよろしいと思います。

では私の好きな言葉を紹介します。

「うそをつかない」

初めての方もおられますので、お聞きします。

今朝起きてから今の時間までの間に、嘘をついた方はおられますか？

先週1週間、嘘をつかなかったという方はいらっしゃいますか？

リップサービスまで入れてしまうと、難しいと思いますね。

できるだけ嘘を付かない人生が良いと思います。

自分で“今週はこれをしよう”と思ったものが出来なかつたら、やはり自分に対して約束を守れなかつたという事です。

どうしてもこれだけは身に付けたい、覚えたい、何とかしたい・・・というものは、ほんのつか二つで良いと思います。

人様との約束は、しなければ良いのですから、これは嘘をつかないですみます。

一つだけ何か決めたら、何が何でも守る努力をすると良いと思います。

そうしてゆけば人生は非常に明るくて爽やかなものになると思います。

私の好きな言葉、もう一つは「利によりて行なえば、怨み多し」です。

目の前の具体的な欲にかまけた動きは、しない方が良いでしょう。

私も身をもって体験し、この言葉が身体の中に沁み込みました。

今、「目の前の資金繰りが大変で、中斎塾で勉強している暇はない」とおっしゃる経営者の方がおられます。

資金繰りが大変で潰れるなら、一回潰れてみたら如何ですかと、感じました。

そこから這い上がれば良いのです。

その為の知恵は、いくらでも皆様お持ちだと思います。

仮に潰れなければ、どうやって這い上がるかという知恵も、一緒に相談して出していけるのではないかと、中斎塾はそういう知恵も学べる場所だと思います。

中斎塾の目的を少し申します。

基本哲学の「知足」の説明になります。

この会の目的は、こういう勉強をする事によって判断基準をまず身に付けます。

<本質・大局・歴史>の判断の三原則を身に付ける事によって、咄嗟の困った時に、本質・大局・歴史のどれか一つでも頭に浮かんでくれば、乗り切ることが出来る。

この会に出る事によって、判断基準が身に付いてくるであろうと考えておりますし、そういう方向で進めたいと思っています。

そして判断の三原則を身に付けたら、<足るを知る>という考え方（がつつかないでほほどが良い）を腹の中にずっしり収めることによって、社会のお役に立つ動きが出来る。

ということは、自分の個人的な充実感が更に増すという事につながります。

そして家庭が円満になってきます。

会社の中でも<足るを知る>という考え方で進めていくと、「もっと仕事を取って来なさい」「もっと良い値で取って来なさい」・・・という事がなくなって、お客様との信頼関係も深まります。

そうすると社会のお役に立つと考えます。

<足るを知る>ことで、個人・家庭・会社・自治体との関係が円満になっていく。

それを踏まえて、3年後くらいを目途に、自治体の通信簿のようなものを作りたいと思っています。

そして外国へも<足るを知る>という考え方を輸出していきたい。

その考え方が「地球と共存してゆこう」とか「地球環境を守る」という考え方に直結してきます。

ちなみに中斎塾の顧問の木内孝さんが、3月にイギリスの議会の環境問題に関する委員会に招聘されて、＜日本の政府と企業の環境問題への対応＞について講演をして来られました。

木内さんは講演の最後に

「日本の環境問題は酷いように思われているようですが、日本人には＜足るを知る＞という心があります。足るを知る心が日本民族の根底にある限り、環境問題で皆様にご迷惑をかけるような事はありません。」という内容で締め括ったそうです。

我々が勉強しているものは、ここだけではなくて、日本の国の至る所に話が広がっていくものであって、世界にもその話を広げていこうとしています。

そういう目的を持った会であり、現実にもそういう動きをしているわけです。

最後に時事判断を申します。

先日、目白学芸フォーラムに出席しました。

中川政調会長が来られて講演をしました。

見るからに疲れきっていました。

態度も一見問題ないのですが、目を見て話を聞くと、いつもよりぞんざいで無作法だなという感じを受けました。

「政治家は人さまから信頼されなければ出来ない仕事だけれども、あなたは人さまから信頼されていると思いますか？ 政治に携わる人は私心なく仕事をしなければならないけれども、あなたはそうなさっていますか？」とお聞きしたかったのですが、質疑応答もなくすぐに帰られてしまいました。

氣になった台詞がありました。

「安倍さんとは、毎週たっぷり時間をとって打合せをしています」と言っておられました。

これだけ疲れきった様子をあらわにする人が自民党の政調会長を務めているのは怖い、この国は不安だと思いました。

やはり政治に携わる者、組織のトップにある者は、いくら疲れきっていても人さまから信頼されるような言動を心掛けなければならないし、自分がどう見られているかも氣を使わなければなりません。

木内先生曰く、「人は偉くても即、墮落するものだからね。」

よくよく氣を付けて、常に自分を磨き続けていないと危ないと思います。

この間、国民投票法案が通りました。

18歳以上の方から投票できるわけです。

日本の国は根本から変わる状況下に来ていると感じました。

特に次官会議の結論を得ないで、政府で新しい方針を出しました。

今の天下り法案は、次官会議を通っていません。

日本の政府で決めていく法案は、各省庁の次官が集っての次官会議でOKにならない限り上に上がらない仕組みでした。

安倍首相はそれを無視して、今までの歴史の中で始めて、次官会議を気にしないで仕事をしているわけです。

その上で天下り法案が通り、しかも国民投票法案を通したわけです。

これは日本が根底から揺すぶられる、相当大きな動きだと考えています。

今までの法律の通り方と、今の法律の通り方とは違いますから、大地震の前触れの余震があったという感じがします。

天下り法案と国民投票法案、これによって大地震の予感を覚えています。

以上で本日の北関東フォーラム第2回目を終了致します。

有難うございました。